

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

事務局ニュース第 11 号

(2012 年 12 月 15 日)

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965 年 3 月 28 日

支部長 正木光江
事務局長 荒川恒子
会計 山下道子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース編集 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み (1)

日本支部設立の日は 1965 年 3 月 28 日

今から 50 年ほど前のことです。1963 年から 1966 年までケルン大学に留学された現日本支部長、正木光江さんは 1964 年 5 月ハインリッヒ・シュッツ協会レムゴ大会に出席し、入会手続きをなされ、日本人メンバー第一号となりました。さらに翌 1965 年 5 月のベルリン大会にも出席されました。開会挨拶にたった K. フェッテルレ氏は、「国境を越えて」とのスローガンを掲げて、協会がより国際的に飛躍することを願ったそうです。大会終了後、協会会長でベーレンライター社社長フェッテルレ氏は、カッセルの自宅に正木氏を招かれ、「実は今年服部幸三氏が、日本支部を設立されたので、帰国したら是非その仕事を手伝ってください」と固く依頼されたのでした。そ

の約束を守り、正木氏は2007年5月の総会で支部長に就任なさるまで、帰国早々の1967年から40年間事務局をひとりでお守りくださいました。

1965年発行の『アクタ・サギタリアーナ』第3号に、次のような記事が掲載されています。「1965年3月28日に、「日本バロック音楽協会」がシュッツの《十字架上の七言》を初演し、全国に放送された。イエス役はヴィーンのエクイッツ氏、指揮は金子 登氏、その他全て日本人の音楽家による演奏であった。その感銘の許に、日本支部が設立された。我々は協会の最も若い支部を祝福し、今後の発展に期待する」。

今まで日本支部の設立事情や年月日を記載することがありませんでした。そこで正木支部長と語らい、1965年3月28日を国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の設立日と明記することといたしました。

さて国際ハインリッヒ・シュッツ協会の発足は1922年に遡ります。しかしそれは短命でした。現代に至る協会史の本当の始まりは1930年です。昔の音楽家が皆そうであるように、シュッツは与えられる様々な機会に合わせて、同時代の人のために作品を書きました。そしてその機会が終われば、作品は繰り返し演奏されることは、ほとんどありませんでした。生前は「新しい音楽を書く、最も優れたドイツの作曲家」と称えられたのですが、亡くなると音楽の表舞台から、姿を消したわけです。しかし歴代の優れた音楽家の中で、彼は生き、学び続けられました。再度彼の楽譜が出版され、演奏され、一般聴衆の前に姿を現したのは19世紀後半のことです。昔の音楽の蘇演として、F.メンデルスゾーンが1829年にバッハの《マタイ受難曲》を演奏したことは、よく知られるところですが、ドイツの多くの音楽家が同様の運命を辿るのです。F.リストやJ.ブラームスがシュッツの音楽を、知らしめるのに貢献しました。1885年にはP.シュピッタが全集（旧全集）を刊行します。そして特にモテットと宗教的合唱曲が、頻繁に演奏されるようになるのが1920年代です。そのような気運の中でハインリッヒ・シュッツ協会が発足したのです。また1931年にはE.H.ミュラーがシュッツの書簡集を、1936年にはH.J.モーザーが、シュッツのモノグラフィー*Heinrich Schütz: Sein Leben und Werk*を出版しています。これらは現在でも基本的文献として、読まれ参照され続けています。

シュッツ協会は、第二次世界大戦の最中から戦後、すなわち1939年から1953年の間は、活動を休止していました。しかし再開した1954年から、スウェーデン、オランダ、スイス、イギリス等でシュッツ・フェストを開催し、またそれに呼応するように、1955年からは新シュッツ全集の刊行を行なっています(2012年4月の時点で35巻、最終的には43巻になる予定)。そして協会は1963年に「国際」の文字を冠するに至ります。その直後に、現日本支部支部長が、ドイツでメンバーとしての登録をなさった訳です。

(国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局を任されて、何も知らぬままに5年が過ぎました。正木支部長がドイツで協会のメンバーとなって、まもなく50年という記念すべき年となることを、今回初めて知りました。支部長にお尋ねしたり、昨年亡くなったA.フォルチュルト Forchert氏が1996年にまとめ、『シュッツ・ヤールブーホ』に掲載した、協会の歴史等を参照しながら、少しずつ日本支部の歩みをお伝えいたします)

(事務局長 荒川恒子)

トルガウにおけるハインリッヒ・シュッツ・ターゲ報告

2012年9月27日-30日

日本支部長 正木光江

本年度のシュッツ・ターゲは、2017年の宗教改革500周年記念大祝祭を5年後に控えて選ばれたテーマ、「ハインリッヒ・シュッツと宗教改革時代の音楽」に相応しく、ドイツでは「宗教改革育ての親 Amme」と呼ばれているエルベ河畔のルネサンス都市トルガウで開催された。トルガウと言えば、シュッツの《ダフネ》が1627年に上演されたハルテンフェルス城の街であり、ルターの音楽上の最良の協力者であったヨハン・ヴァルターが活躍し、没した所である。人口2万足らず、ライプツィヒのほぼ北東50kmに位置するこじんまりとした都市で、シュッツ協会の宿となった市内で一番古いホテルGoldner Ankerの真正面には、市場のたつ広場がひろがり、その直ぐ目の前に1567年に建て直されたルネサンス様式の市庁舎が辺りを払っている。

選帝侯の家系が代わって1547年第6代目のモーリッツ侯がドレスデンに居城を移すまでは、トルガウはザクセン選帝侯の居城所在地すなわちザクセンの首府であった。往時の政治の中心地であり、「宗教改革の母」と呼ばれるヴィッテンベルクを改革運動の拠点としながらも、行政面の解決のためにルターはしばしばトルガウを訪れている。彼は1529年、トルガウに最初のプロテスタント教区監督職を置き、1544年に初めて宗教改革の理念を体現

した礼拝堂を城内に建立した。

音楽家ヨハン・ヴァルターは、ライプツィヒ大学在学中に選帝侯の礼拝堂聖歌隊のバス歌手を務め、ルターが建て替える前の礼拝堂ですでに歌っていた。1524年画期的なドイツ語による《ヴィッテンベルク賛美歌集》を出版、1525年ルターと共に苦勞を重ねて「ドイツ語ミサ」をつくり上げた。またトルガウにラテン語学校を設立し、やがて生徒達と音楽好きの市民が一体となって最初のプロテスタント・カントライ(聖歌隊)が生まれ、この制度は急速にプロテスタント圏に広がった。この伝統は、ヴァルターの名を冠したカントライによって、現在もなおトルガウにおいて守られ、伝えられている。ドレスデンに居城が移ると、ヴァルターはドレスデン宮廷礼拝堂の初代楽長に就任し、70年後にドレスデンに入ったシュッツへ到る道を拓くのである。

9月27日(木)

開会式 15:00-16:00 於: 城館教会

Johann Walter(1496-1570): Wach auf, wach auf, du deutsches Land

開会の挨拶 Hans Christian Beer 氏 (城館教会およびトルガウ市聖マリア教会牧師)

Heinrich Schütz (1585-1672): Nun lob, mein Seel, den Herren (SWV 201a)

挨拶 Michael Czupalla 氏 (北ザクセン郡郡長)

Johann Walter: Ein feste Burg ist unser Gott

挨拶 Prof. Dr. Walter Werbeck 氏 (国際ハインリッヒ・シュッツ協会会長)

Martin Luther (1483-1546): Non moriar sed vivam (詩篇 118, 17)

記念講演 I KMD Prof. Dr. Wolfgang Herbst 氏(前シュッツ協会会長)

「ルターの神学的音楽観との関わりについて Vom Umgang mit Luthers theologischer Musikanschauung」

Samuel Scheidt (1587-1654): Modus ludendi pleno organo pedaliter

(タブラトゥーラ・ノーヴァ 第3部より)

開会式は、ルターが宗教改革の精神を体して建立し、自身説教を行った初めてのプロテスタント教会である、トルガウ城館教会で行われた。定刻になると、先ずヨハン・ヴァルター・カントライ・トルガウによるヴァルター作曲のコラール合唱《Wach auf》の清冽な響きで始まり、城館教会牧師ベール師、北ザクセン郡長チュパッラ氏、シュッツ協会会長フェルベック教授の夫々の挨拶が終わる毎に、シュッツ、ヴァルター、ルターのコラールの美しい歌声が礼拝堂にこだました。ヘルプスト教授の講演の後、トルガウ市聖マリア教会のカントルとオルガニストを兼任されているKMD(教区教会音楽総監督)エッカルト・ザレツ師によるシャイトのオルガン曲の奏樂によって余韻を残して式は閉じられた。

神学者でもあられるヘルプスト教授の講演は、ルターの音楽観の成立と背景を振り返り、現代の礼拝におけるその関わり的重要性を述べられたが、ルターの著作の引用が多く、私には聴き取れない部分が多々あったので、再来年のシュッツ年鑑を読み直さなければならない。

トルガウ市長主催のレセプション 16:30 於: 市庁舎

開会式のあと、会場を市庁舎に移して、トルガウ市長シュタウダ Andrea Stauda 女史主催のレセプションがあった。市長は、シュッツ協会大会の開催地にトルガウが選ばれたこと、国外からも多くの客人がトルガウを訪れたことに、喜びの気持ちを述べられた。翌日と最終日のトルガウ新聞に写真付きで、紹介記事が掲載された。

市内見学 17:30

《Acta Sagittariana 2012》の表紙に描かれた1650年頃のトルガウのメリアン古地図は、ドレスデンからトルガウを通してヴィッテンベルク、やがてハンブルクへと流れる、エルベ河の左岸に沿って建つハルテンフェルス城(向かって左)と聖マリア教会の外観を今に伝えている。私は短時間見学のグループに加わって、ガイドに先導されながら市庁舎前の広場からスタートして、聖マリア教会はやや丁寧に、大会のメイン会場となった城やその他の建物は、概観のみを小一時間見て歩いた。

中世に建てられたフランシスコ修道院の前を通り城門前の橋を渡り、ザクセンの紋章のついた城門をくぐって中庭に出ると、4階建ての宮殿の屋根まで続く、総石造りの見事な螺旋階段が設えてあり、初期ルネサンスのドイツのすぐれた建造技術を見せてくれた。城門の左手に開会式の会場となった城館教会の入り口があり、これは宗教改革の最重要建築物である。城門の正面右奥に、ひと際高く聳える守衛塔は、大胆公とよばれた選帝侯ヨハン・フリードリヒが1533-35年に城の改造と新築を行った時に、より高く、より広くされ、トルガウ市中の一番

高い塔になった。城門を入れて右手地階の袖では、「選帝侯の近衛隊」と題された展示会が5月から来年の10月まで長期にわたり催されている。ドレスデン国立博物館の兵器庫と提携して、選び抜かれた200以上に及ぶ、近衛兵の軍備、装備の品々あるいは絵は、宗教改革時代の歴代の選帝侯の宗派政策を知るためにも、またとない機会であったが、閉館のあとで残念であった。荒川さんは、守衛塔の上からの市街の眺望も、エルベ河畔の景観も、近衛隊の展示会も最終日にご覧になったとのこと、流石である。

トルガウ市で一番歴史が古く、中世、ルネサンス、バロック、18、19、20世紀と変遷を重ねてきた聖マリア教会は、市の教会 Stadtkirche と呼ばれて、市民の心の拠り処となっている。守護神はマグダラのマリアで、2001年に国家文化財となった。教会西側の塔は1230年完成、現在の後期ゴシック様式の姿となったのは1490年選帝侯ヨハン・フリードリヒ賢公(在位1486-1525)統治の時代で、この選帝侯はヴィッテンベルク大学を創立し、ルターをよく理解し、ヴォルムス会議後、誘拐を装ってルターをアイゼナッハのヴァルトブルグ城に匿った領主である。彼はまた信仰心に篤く、教会音楽とオルガン演奏をこよなく愛し、芸術への造詣も深く、ルーカス・クラナッハの名作「14人の救済聖人」を1505年に聖マリア教会に寄進した。トルガウで没したルターの妻カタリーナの肖像が彫られた墓石(1552)は、現在内陣北側の壁に掛けられている。後期ルネサンスの見事な造りの説教壇(1578)、G.シモネッティの祭壇(1694-97)など内陣も変わり、1884-85年にはルターの全身像がステンドグラスにつけられた。1967年以降包括的な修復が始まり、1984年にツィッタウのシュスター社が手がけた新しいオルガンが、教会の北の側廊に据え付けられた。

聖マリア教会の向かい側には、ルターやメランヒトンが息子を学ばせたというラテン語学校、ヨハン・ヴァルター・ギムナジウムが現在も“Gelehrtenschule (学識者のための学校)”と呼ばれて残っている。

コンサート I 「1550-1650のフランス、イタリア、ドイツの世俗声楽曲」 20:00 於: 城館教会

初日のコンサートでは、「アンサンブル・サギタリウス」の出演により、宗教改革時代のフランス、イタリア、ドイツの世俗声楽曲が多数取り上げられた。第1部は、フランスのポリフォニック・シャンソンとエール・ド・クール、第2部は、イタリアのマドリガーレ、バレットやヴィラネッタとドイツ語のポリフォニック・リートで、4-5声部の短い合唱曲が多い。エール・ド・クールは、通常リュートやテオルボの伴奏にのって歌う独唱曲で、二重唱の場合もある。これらの世俗曲にはロンサールの詩集から通俗的な歌まで様々な歌詞が選ばれていた。ミュンヘンの宮廷にいたラッソ、イタリアに留学したハスラー、シュッツの親友のシャインやM.プレトリウス、甥のアルベルトの名が並んでいた。宗教改革時代の世俗歌曲は、人間の生命力を精一杯歌いあげていて、ここから宗教改革運動が必然的に起こったことが理解出来る。ルターはコラールを新たに創作するにあたって、しばしば民衆に親しまれていた歌をコントラファクトゥム(替え歌)として用い、ヴァルターらは、これらの世俗合唱曲と共に、コラール旋律をベースにしてルネサンス・ポリフォニーの技を磨いた。登場する音楽家たちはみな宗教曲の作曲家でもある。

9月29日(金)

講演II Prof. Dr. ハイドリヒ氏 Jürgen Heidrich(ミュンスター大学)

9:30 於: 城館のプレナール・ザール

「ルター、シュッツとザクセン選帝侯の宮廷 Luther, Schütz, und der kursächsische Hof」

ルターは、1529年トルガウ市にプロテスタント教区監督を置き、1544年に城内に最初のプロテスタント教会を建立した。この講演においては、ルター、シュッツと、ザクセン選帝侯宮廷礼拝堂の教会音楽を中心に話をされたので、冒頭は大会初日のヘルプスト教授のルターの神学上の音楽観と重なる部分が多かった。また教皇やドイツ皇帝の強固な反対にも拘らず、ルターが自分の信念を貫き通すことが出来たのは、歴代のザクセン選帝侯の高い見識に拠ることが無視できないと指摘された。続いてトルガウ宮廷楽長コンラート・ルプシュ Rupsch と、トルガウのカントルからドレスデンの初代楽長に就任したヨハン・ヴァルターの業績に移り、特にルターの後半生の最大の業績であるルター監修ヴァルター作曲の多声の《ヴィッテンベルク賛美歌集》(1624)とルターの「ドイツ語ミサ」(1625)への2人の貴重な音楽上の助言、ヴァルターがトルガウのカントルの伝統をドレスデンへもたらした「音楽と釈義は不可分のもの」と主張したルターを、コラールや自作のマニフィカトを通してドレスデンで実践したことが挙げられた。作品の大半がルター訳の福音書を歌詞とするシュッツに関しては、ドレスデン宮廷の礼拝で歌い続けられた《ベッカー詩篇歌集》(1628, 1661, 1676 ベルンハルト版)が集中的に取り上げられ、ザクセンばかりでなく、広範な地域の教会、学校、家庭に影響を及ぼしたことが説明された。なお《ベッカー詩篇歌集》については、寺本まり子著『詩篇の音楽』(音楽之友社)の第3章第2節「シュッツと詩篇の作曲」に、

詳細な論文が掲載されている。

講演Ⅲ Dr. シュミッツ氏 Peter Schmitz(エッセン芸術大学) 10:00 於: 城館のプレナール・ザール
「17世紀の葬送音楽に映し出されたルターの死についての神学

Luthers Theologie des Todes im Spiegel der Funeralkomposition des 17. Jahrhunderts」

17世紀の宗教音楽には、精巧なポリフォニー、教会コンチェルト、複合唱、通奏低音付きの独唱・重唱曲等々の様々な形態の出現、それにフィグーレン・レーレ(音型論)も入ってきた。しかしいずれの形態を取るにせよ、ルター派教会の音楽家が作曲した葬送音楽の背景には常にルターの死についての考えが根底に在った。死は滅びではなく復活であり、悲嘆ではなく彼岸への憧憬である……。ルターの死についての説が著作、福音書、歌詞、絵画を引用して説明された。作曲家の中に、ライプツィヒのミヒャエル Tobias Michael、ケーニヒスベルクのアルベルト Heinrich Albert、同じくゼバステアーンニ Johann Sebastiani、フライベルクのデマンティウス Christoph Demantius の作品名が挙げられ、曲の説明があった。曲例としてシュトゥットガルトの参事会オルガニストが作曲した、子供の死を嘆き悲しむ両親の情景を歌った歌曲、通奏低音付き3声部(SSB)の作品がテープによって紹介された。有節形式による情緒的な声楽曲であったが、葬送音楽の感じに乏しかった。

総会 11:00 於: 城館のプレナール・ザール

今回は、初めて大会参加者のリストが配られた。110名のうち、総会の出席者は46名。会長の挨拶、会計報告、と例年通り進み、1979年の創刊以来シュッツ年鑑編集委員を務められたクルムマッハー教授の辞退が承認された。日本支部の報告では、昨年東日本大震災のあと、国の内外で数多くのチャリティー演奏会が開かれ、日本支部の会員の方々も積極的に参加されたこと、地震のために会場が損傷し、1年延期されていた「ムシカ・ポエティカ」(シュッツ合唱団を中心とするさまざまな声楽・器楽のグループを併せもつ演奏団体)による、リストのオラトリオ《クリストゥス》の上演が無事に実現して好評を得たこと、同じ理由で1年延期されていた「国際古楽コンクール(山梨)が「古楽フェスティヴァル(山梨)」と名称を変えて、コンクールだけではなく、審査員によるマスター・クラス、コンサート、古楽器の展示会等々3日間にわたって盛大に再開されたこと、次に会員の出版活動、そして最後にシュッツ合唱団が新たにシュッツの全曲録音を開始、第3巻まで既に公刊されていることなどを報告した。昨年ハノーファーの大会参加者の演奏活動については、大会に参加された方であることもその都度紹介した。本年度は役員改選の年で、その選出方法は予め常任理事会によって選出された会長、副会長、書記、会計主任の4名の候補者に、賛同する場合は配布された紙片に総会出席者が候補者名を1名ずつ記入し、それを集計して会長から順番に決め、審議会委員7名は列記するという方式で行われた。異動があったのは、高齢のため辞退されたオランダのツヴォル氏 Cornelis van Zwol 氏からシュモル＝バルテル氏 Dr. Utta Schmol-Barthel 氏へ、副会長が代わられたことのみであった。ブライク Breig 教授から会費値上げの動議があったが、賛否両論で結局来年度は据え置きとなった。

コンサートⅣ 「Verleih uns Frieden gnädiglich」 20:00 於: 聖マリア教会

シュッツ・ターゲの最後の夜は、「われらにみ恵みふかく平安を与えたまえ」と題されて、「元祖カントル」であるヴァルターの、城館教会の建立式典の際に歌われたラテン語のモテト(Beati immaculate in via)(1544演奏)で始まり、「ドイツ音楽の父」シュッツの師ガブリエリの《Sacrae symphoniae》(1615)の14声部の複合唱モテト(in ecclesiis)、ガブリエリの影響の許に書かれたシュッツの《ダヴィデの詩篇曲集》(1619)から(Ich danke dem Herrn von ganzem Herzen)(SWV 34)、ヴァルターがライプツィヒの聖トーマス教会設立50年記念のために作曲した金管合奏曲から(Fugen auff die acht tonos)(1542)、ルター作詞ヴァルター作曲のコラールの5曲、なおその中の1曲(Verleih uns Frieden gnädiglich)がコンサートのモットーとなった。さらにシュッツの《Symphoniae sacrae III》から2曲(SWV 416, 398)、「教会音楽の父」パレスリーナの5声部のモテト《Ascendo patrem meum》と、同じ歌詞のヴァルターの6声部のモテト、ガブリエリの8声部のカンツォーナ、シュッツが30年戦争終結の1648年に公けにした《宗教合唱曲集》第5曲(Gib unserem Fürsten und aller Obrigkeit)(SWV 373)、最後に再度シュッツの《ダヴィデの詩篇曲集》から(Lobe den Herren, meine Seele)(SWV 39)が力強く歌われた。ガブリエリやパレスリーナの登場は、来年度のヴェネツィア大会を予想させるものでもある。声楽アンサンブル Capella Angelica と器楽アンサンブル Lautten Compagny Berlin の熱演とともに、嬉しいプログラムであった。

9月30日(日)

主日礼拝 11:00 於: 聖マリア教会

シュッツの時代の教会規定による、ドレスデン宮廷礼拝堂の主日礼拝を模した式次第におおむね従って、最終日の礼拝が行われた。聖歌隊には、今回コア・プロジェクトに参加した協会員とヨハン・ヴァルター・カントライ・トルガウ、それにベルリン・リュート・カンパニーが加わった大編成で、滞在中のドレスデンから大会に出席された高橋美紗さんも合唱に参加された。説教はヴィッテンベルクの監督教区長ジークフリート・T. カスパリック尊師で、4人の福音記者の見事な浮き彫りに飾られた螺旋階段上の説教壇から、張りのある声で朗々と説教をされた。オルガンは聖マリア教会カントルのザレツ師であった。ヴァルターのコーラル合唱〈Allein auf Gottes Wort〉で始まり、説教の後のモテットはシュッツの《宗教合唱曲集》から〈Herr, auf dich traue dich〉(SWV 377)、続いてメルヒオール・フランクのコーラル《Wenn du geladen wirst, so gehe hin》、そのあとの聖餐式には、シュッツの《12の教会歌集》から〈Vater unser〉(SWV 429より)とメシヤンの《聖餐の前の祈り》、集禱、最後は前夜のコンサートのモットーであったルターの「Verleih uns Frieden gnädiglich」を歌詞とするハンス・レオ・ハスラー作曲の宗教的合唱曲で礼拝を終わり、バッハの《プレリュードとフーガ ホ短調》(BWV 548)のプレリュードが奏されるなか、解散となった。

トルガウはもともと973年にその名を歴史に記す古い都市であるが、中世の面影は余りない。城も塔も教会も家並みも、本当の姿を知ることはなかなか難しい。それだけに宗教改革時代の栄光を蘇らせたいと願う人々の思いは強いのであろう。

(初日夜のコンサートで私は不覚にも体調を崩して途中で退席し、翌日のヴィッテンベルクへのエクスカージョンと、夜の《ダフネ・ファンタジー》をキャンセルしたので、報告の重要な部分が欠落してしまったことを皆様にお詫びいたします。荒川さんをはじめ、高橋さん、執行委員長のフレイリヒさんにご心配をかけ、お支え頂いたことを、紙面をお借りして深く感謝いたします)

トルガウを訪れて —演奏会を中心に—

会員 高橋美紗

シュッツ協会の大会へ3度目となる参加を果たしました。8月末より滞在していたドレスデンから列車に乗り、ライプツィヒで乗り換えて3時間ほどでトルガウに到着しました。街は決して大きくはないというのが第一印象でしたが、歩を進めるにつれ、どこからともなくロマンの凝縮された雰囲気におそわれました。黄色い木の葉で敷き詰められた道、小さくても充分用を果たす道案内板、何百年もの時間を経てきたのであろう古くて趣のある民家。それらが寸断なく今につながっていることを感じ、もう早速トルガウの街が大好きになっていました。毎年開催されるシュッツ・フェストやターゲは、盛り沢山の内容で参加者を楽しませてくれるのですが、もちろん今回もです。

今回のご報告では、演奏会についてまとめてみたいと思います。初日の晩にシュロス・キルヒェで開かれたのは、「Weltliche Vokalmusik zwischen 1550 und 1650 aus Frankreich, Italien und Deutschland」と題された演奏会です。フランス、イタリア、ドイツの三国三様な世俗歌曲がプログラムに並びました。順に聴いていくと、同じ時代で共有されていた雰囲気がありながらも、言葉の違いによる語感やリズム感の微妙な違いに気づかされました。言葉が変われば音楽の性格も変わるところがおもしろい。たとえばフランスのセルミジ作《Il me suffit》は、のちのドイツでは《Was mein Gott will, das g' schie allzeit》で知られるコーラルになりました。前者では現世へのあきらめと死への渴望がやんわりと歌われるのに対し、後者では敬虔な宗教心がかっちりと歌われます。多声によるもののほかに、ソロ主体のものもあり、各声部のキャラクターがそれぞれに魅力的でした。客席の人気はテノールにあったようです。聴きくらべてみると、世俗マドリガーレとは大抵シャララ〜と歌って踊れそうな声楽アンサンブルだと体感しました(今回は歌のみでしたが)。時にはお酒で盛り上がり、時には恋の悩みをひとりで歌うこともあるけれど、彼らは毎晩マドリガーレを歌って、毎日を生きていたのだらうと楽しく想像しました。

2日目の晩は今回の目玉演奏会です。オーピツの脚本《ダフネ》をもとにした人形劇と演奏による「ダフネ・ファンタジー」。舞台上で白い人形が操られ、ストーリーは朗読によって進行する形をとっていました。心理的に重要な場面や舞台転換のときに、シュッツと同時代の作曲家ファリーナ Carlo Farina らのリトルネロなどの演奏が挟まれます。私は音楽のときには音楽をしっかり聴き、朗読のときには舞台の人形劇に注目し、視覚的には十分に楽しむことができました。奇をてらった現代創作劇ということはありませんでしたが、台詞や独白などの読み上げが、音楽との関わりという点では薄いと云いたくなるのは音楽偏重の聞き方でしょうが、音楽が消失していることを、積極的に活かしたという点でよかったです。トルガウその地で上演されたことには、天上のシュッツも笑顔で見守ってくれたことでしょう。

第3日には夕方から晩にかけて2つのコンサート。まずは、トルガウにある2つの教会オルガンを続けて聴かせていただける趣旨のもので、いずれもザレツ Ekkehard Saretz さんによる説明と演奏です。まずはハルテンフェルス Hartenfels 城館教会のオルガンをバロックのレパートリーで。この教会はドイツ最初のプロテスタント教会で、1544年にマルティン・ルターによって聖別されました。オルガンは1994年に奉獻され、ルネサンス様式による造りと響きを持ちます。3段、21レジスター、ミーントーン調律。ブクステフーデ、J. S. バッハらのコラル・ファンタジーが演奏されました。定旋律に基づいて紡ぎだされる音たちに、時空を超えた感覚を得ずにはいられませんでした。市の教会聖マリアは高い塔が印象的な教会。1972年の修復時にシュスター・オルガン Schuster-Orgel が新たに取付けられました。今度はメンデルスゾーン、レーガーのコラル労作で、前半とはまた違った壮大な印象に言葉も出ないほどでした。

オルガン・コンサートの後、荒川さんとお茶をいただきながら、エルベ川を見下ろすようにして真っ赤な夕焼けを楽しんでいるうちに、次のコンサートの時間に。めっきり冷え込んだけれども、聖マリア教会には街の人やシュッツ協会以外の人もいらしてか、前方の席は埋まるにぎわい。千秋楽となるコンサート「Verleih uns Frieden gnädiglich」はヴァルターとシュッツを交互に組んだプログラムでした。まず目をひいたのは演奏陣の配置。歌手は4パート分かれて別のところに位置し、同じ音域のところに器楽も固まっていました。私の座った席(正面向かって右側)はテノール音域群に近く、このようなグループ別の配置だと声部としての一体感は増すように見受けました。次の曲で少し配置を変え、歌手陣は通常見るような配置にまとまりました。その後も曲によって少しずつ配置を変えていて、こだわりのある音響の作りこみが功を奏していました。シュッツの《Gib unsern Fürsten und aller Obrigkeit》(SWV 373)は、昨年のシュッツ・フェストの合唱プロジェクトでは5声合唱で歌ったものですが、ここでは上2声をソプラノ、下3声は管楽器という選択でした。全体の響きはすっきりとし、デュエット独特の声部のからみが美しく浮き出ていました。また金管の響きが下にあることからくる音のグラデーションが何とも言えず美しかったです。聴衆は長い拍手でこの演奏を称えました。声楽と器楽のバランスが非常に考え抜かれていて、響きのバランスというこの時代特有のツールがともうまく働いていたように思います。器楽アンサンブル Lautten Compagny Berlin の構成は、木管・金管に加え、なんとそのバス楽器の多さに驚きます。ドゥルツィアン、リュート族(キタローネ)2本、ポジティブ・オルガン、8フィートと16フィートのヴィオローネ、楽器の種類をそろえることで、音色のパレットを豊かにし、そこから変幻自在の音色を作り出して行ったのです。その感動を語りきれないままに、仲間たちと語り合った晩となりました。

次回のシュッツ協会大会はヴェネツィアです。街の魅力もさることながら、すばらしい演奏にも必ずや出会えるはずと、今から楽しみでなりません。

ハインリヒ・シュッツ・ターゲに出席して

日本支部事務局長 荒川恒子

シュッツ協会の集まりに定期的に出席し始めて5年になる。これは私が日本支部の事務局を預かることになった年月に重なる。ここの集会の持ち方は大変リラックスしていて、それだけに初年度は正木支部長の助力なくしては、全体観がつかめなかった。そこで今回はまず全体の構成をお知らせしておこう。

シュッツ協会の集まりにはターゲとフェストがある。言葉としてはフェストの方が華やかな響きであるが、あまり内容を区別しているようには思えない。どちらであれ必ずプログラムに含まれるものは、以下のとおりである。開催期間は原則として、木曜日の午後から日曜日の昼までである。木曜日午後には開会を告げるに相応しい音楽を伴って、挨拶とその年のテーマに関連しての短い講演がある。日曜日の午前中に、メンバー有志が地元のカントライ等と共に練習した、音楽付き礼拝で締めくくる。期間中には少なくとも2本のコンサート、開催地の歴史散歩、近郊への小旅行、2本程度の講演、総会が必要不可欠な内容である。毎晩メンバーが自由に集まる場所も決められ、コンサートの後、三々五々に集い、おしゃべりをする楽しい時となる。大会のために特に会費を徴収する訳でなし、総会などはできれば参加しないというのは、いづこの国も同様である。何度か出席して、ようやく顔見知りから知り合いへと、友好が進むのである。また開催地は大変な役割と雑務を喜んで買って出て、市長自らがビュフェ・パーティ等を催してくださる。

今年はトルガウ城館教会において、ヨハン・ヴァルター・カントライ・トルガウによる J. ヴァルター(1496-1570)、H. シュッツ(1585-1672)、S. シャイト(1587-1654)の歌に挟まれて、当教会の牧師 H. Ch. ビーア氏、北ザクセン郡長チュパツラ氏、協会会長 W. フェルバック氏の挨拶、そして W. ヘルプスト氏の講演と続いた。なおヘルプスト氏は神学者、教会音楽の専門家、礼拝における賛歌等の研究者であるので、これからの数日の体験に対する心の準備に相応しいお話であった。この教会を M. ルター(1483-1546) は1544年10月5日に、最初のプロテスタント

教派の理想の体現である教会として祝福した。続いて市庁舎において、市長から心のこもった御もてなしを受けた。その後が恒例の街の歴史散歩、夜のコンサートと続く。「1550-1650年フランス、イタリア、ドイツの世俗的声楽曲」という、一見今回の主題にはミス・マッチのような内容のものであった。しかし音楽を愛するルターが、会衆歌コラールに採用した旋律の多くは、これらの既知の歌であったことを想起すると、今回の企画の深い意味が見えてくるように感じた。

さてトルガウの様子をお知らせしておこう。当地は1547年までザクセン選帝侯の居城のあった場所で、政治の中心地、またルター、さらには宗教改革の音楽と深く関わりのある地である。フリードリヒ賢王(1463-1525)の宮廷楽団には20名ほどの歌い手、それに楽器奏者とオルガニストが属していた。その中にルターの友で音楽上の師J. ヴァルターがいた。ここがルター派プロテスタント音楽の揺籃の地となるのは、いわば必然であった。1524年にはヴァルターにより最初のヴィッテンベルクの《宗教的歌曲集 Geystliche gesanck Buchleyen》が、また1525年にはルターによる『ドイツ・ミサ Deutsche Messe』が編まれたのである。なお街の聖マリア教会で、初めてドイツ語のコラールが鳴り響いた。メンバーの多くが宿泊したホテルの裏手に、今は半壊状態のニコライ教会がある。ここでは1519年に初めてドイツ語で洗礼が施され、また翌年には最初のドイツ語による説教がされた。夜のコンサートの後、メンバーが寄り集まる場所はレストラン「ケーテ氏 Herr Käthe」と決められた。皆は合点がいつているようであるが、私には皆目見当がつかない。ケーテとはルターの妻カタリーナのことで、彼女が何故「氏」といわれるのか、いわば「かかあ天下」のようなしつかり振りに由来するとか、または大世帯で、貧しい家計を預かる彼女の手腕の素晴らしさを称える意味だとか、諸説が飛び交った。トルガウは未亡人となった彼女が、ペストの流行っているヴィッテンベルクから逃れる途中、事故に見舞われ亡くなった土地である。ここではカタリーナ・フォン・ボーラ(旧姓)(1499-1552)は高く評価され、語り伝えられている。今回の開催地であるトルガウ、さらにはヴィッテンベルクには、キリスト教、音楽、美術、はたまた政治・経済上、重要な場所がありすぎる。ふたつとも数十分で隅から隅まで歩いてしまう規模なのに、記念碑が付いていない家がほとんどないのである。ガイドも多くを説明したい気持ちを抑えて、協会のテーマに合わせて話を絞り込んだ。

翌日はヴィッテンベルクへの小旅行である。ルターの住んでいた家、友人 Ph. メランヒトン(1463-1525)の家、彼らの姿を多く残した画家ルカス・クラナッハ父子の工房、さらにはルターが95か条の意見書を張り出した城館教会の扉等、まさに夢のような一日であった。当地での締めは城館教会でのオルガン・コンサートである。ラーデガスト・オルガンを用いて、当教会のカントル、トーマス・ヘルツァー氏の演奏はJ.S. バッハから始め、19世紀、20世紀の音楽へと進んでいく。すなわちF. メンデルスゾーン(1809-1847)、J.G. ラインベルガー(1839-1901)、J. ツヴァルト(1877-1937)である。それもそうである。F. ラーデガスト Ladegast (1818-1905)はザクセンの誇るオルガン・ビルダーであり、これは楽器の素晴らしさを余す所なく示すプログラムであった。「百聞は一見にしかず」の格言が示す通りの旅行となった。メンバーの中にスウェーデンから参加されたヴィルヘルム・ケンプ氏がおられる。日本の音楽愛好家なら誰でも御存知のピアニストと同名。彼は正真正銘ピアニスト、ケンプ氏の甥なのである。そしてその父親は素晴らしい教会音楽家だったとのこと。街の教会に入った途端、年老いたケンプ氏は自分の来し方を思い出した。その教会こそ父親がオルガンを弾き、小学校時代まで彼が通った教会であった。ヴィッテンベルクとは、戦後西ドイツに移った彼が、二度と訪れることのできないと思っていた故郷であった。「本当に70年振りなの」と私は何度も尋ねた。そして彼の感慨と共に、トルガウへの帰路について。

夜はトルガウの城館教会において、ダフネ・ファンタジーと題された音楽付き人形劇を鑑賞した。《ダフネ Dafne》は、1627年4月13日にザクセン選帝侯ゲオルク1世の長女ゾフィー・エレオノーレと、ヘッセン＝ダルムシュタット方伯の結婚を祝して、上演された音楽コメディエである。ギリシャ神話はシレジアの詩人M. オーピツ(1597-1639)の手によりドイツ詩とされ、それにシュッツが音楽付けした。詩は完全な形で残されているが、音楽は紛失してしまった。この作品は長らくドイツ語による最初のオペラと考えられていたが、実際は演劇にふんだんに音楽が挿入されたものであったろう。この復元にあたっては、情景や物語に合わせて、シュッツを初めとするドレスデン宮廷の音楽家、ドレスデンが大いに影響を与えられたイタリアの作曲家の小曲を挿入した。語り手を用いて、日本の能からヒントを得たという人形遣いが、アポロの愛を拒み、遂には月桂樹に変容するダフネの物語を演じた。私はすっかり気に入って、非常に楽しんだ。しかし「ケーテ氏」に集まったドイツのメンバーの批評は、あまりかんばしいものではなかった。響きがありすぎたのか、音楽も語りも、言葉がきちんと聞えない点に議論が集中した。

翌日は2つの講演、そして総会であった。ユルゲン・ハイドリヒ氏による「ルター、シュッツとザクセン選帝侯宮廷」、ペーター・シュミッツ氏による「17世紀の葬送音楽に映し出されたルターの死についての神学」である。両人共まだ非常に若い学者であるが、論題が専門分野である。学会ではないので、講演内容は新しい学説の

発表ではなく、今回の集いの意義を側面から補うといった意味合いである。正木さんのレポートに内容報告がみられるが、今大会では、開催地、小旅行、音楽会、講演会等が、相互により連鎖反応を示し、ルターやヴァルターの時代を髣髴とさせずにはいられなかった。ハイドリヒ氏は、シュッツの音楽が礼拝において果たした役割はあまりなく、音楽家や愛好家には最も関心の持たれない《ベッカー詩篇歌集》(1661年版)(SWV 97-256)こそが、シュッツの死後まで、長く教会や家庭において受け継がれた音楽である、との見解を強調された。ちょうどドレスデン宮廷における教会音楽のあり方に、疑問を感じていた私にはきわめて合点のいくものであった。午後には城館教会と街の聖マリア教会のオルガンを、両教会のオルガニストで音楽監督を勤めるエッカルト・ザレツ氏の演奏で聴いた。城館教会ではバロック作品、聖マリア教会では F. メンデルスゾーン(1809-1847)と M. レーガー(1873-1916)の作品であった。ほとんどの作品が、ルターの時代から伝わるコラールに基づくものであったこと、トルガウにある2つの時代を異にするオルガンが、演奏曲に非常に合った響きとストップの配置であったこと、連日の忙しさにもかかわらず精力的な演奏を聴かせたザレツ氏の腕前の見事さに感心した。ヴィッテンベルクでのラーデガスト・オルガンといい、トルガウのシュスター・オルガンといい、この地方にはオルガン製作の歴史が脈々と続き、このように小さい街に、今日まで音楽監督、カントル、オルガニストといった職が、高い水準で保たれていることに、深い感慨をおぼえた。ターゲはカペッラ・アンジェリカとベルリンのラウテン・カンパニーによる J. ワルターとシュッツの作品「我らにみ恵みふかく平安を Verleih uns Frieden gnädiglich」により締めくくられた。このふたりの作曲家に加えて、G. ガブリエーリ(1557-1612)、G. P. ダ・パレストリーナ(1525-1594)が演奏された。ラウテン・カンパニーには、ふたりの日本人も加わり、弦楽器と当時の木管、金管、キタローネ、オルガンという色彩豊かなアンサンブルの贅沢な響きである。なお奏者達は、翌日の礼拝でもシュッツ協会のメンバーと共に、奉仕をされた。

ドイツ連邦共和国は、地方によりそれぞれ異なる文化の色がくっきりと浮かび上がる。ザクセンの各地にちりばめられた小都市は、長い年月の間には破壊を免れないこともあったが、昔の姿、面影を色濃く残していた。過去・現在・未来の繋がりを、非常に強く感じさせられた数日であった。

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京40年の軌跡(8)

会員 淡野弓子

今回は1988年からの記録となります。40年を振り返るこの原稿もやっと20年まで来たのか、というのが正直な感想です。

1988年1月14日(火)19:00より武蔵野市民文化会館小ホールにおいて〈守安功リコーダーリサイタル〉が開催されました。～リコーダーの領域Ⅰ～とのサブタイトルのもと、17、8世紀を中心に14世紀のマドリガルから広瀬量平の《メディテーション》に至る興味深いプログラムで、共演者は Vdg: 中野哲也、Fld: 安井敬、Cemb: 武久源造さんです。現在もアイルランド音楽、バロック音楽の研究、演奏に多忙な日々を送っておられる守安さんに、現在の心境を綴って戴きました。

~~~~~

ムシカ・ポエティカの主催で、初のリコーダー・リサイタルを、開催していただいてから、早くも25年、四半世紀の月日がたちます。そのリサイタルの時に、淡野先生は、偶然、今の僕と同じ年齢でした。当時、20代の半ばだった僕は、リコーダーと並行して、日本の笛も吹いていましたが、その後、最終的にフルートで、アイルランドの伝統音楽を演奏することを選びました。

そんな中、4年前に、チェンバロ奏者の平井み帆さんと、「ドーヴァー海峡の向こう側」という名のプロジェクトを始め、アイルランドと英国の伝統音楽、バロック音楽、新しく作られた曲と一緒に演奏することとなりました。そして気がついた時には、長年のブランクの後、もう一度リコーダーを吹き始め、アイルランド、英国だけではなく、ヨーロッパ大陸のバロック音楽も、「ドーヴァー海峡の向こう側」で、演奏するようになりました。今回、淡野先生から送られてきた、1988年1月の、初のリコーダー・リサイタルの曲目を見て、自分が25年の後に、再び吹いている曲が、いくつも、そこに含まれていることに、改めて驚かされるとともに、自分にとっての、25年間は、初のリサイタルの時に取り上げた曲を、自分自身のやり方で、ずっと、あたため、納得できる形で、身と心に納めるためのプロセスであったことに想いをいたしました。この先、自分がどんなことを考え、どんな音楽を発信していくか、今までの人生でいちばん、1日1日の重みと大切さを感じている、今日この頃です。改めてこの場を借りて、1988年の1月に、このような場を用意してくださった、ムシカ・ポエティカと、淡野先生に、心からの感謝の気持ちを表したいと思います。(守安 功)



4月9日(土) 18:30 石橋メモリアルホールにおいてイースタークワイヤ、シュッツ合唱団、ムシカ・ポエティカ声楽アンサンブル、古楽器アンサンブルによって、バッハ《ミサ曲 ロ短調》が演奏されています。演奏メモとして、声楽陣をトゥッティ、コンチェルティーノ、ソロに分けること、器楽は古楽器アンサンブルとすること、ラテン語の読み方はドイツ式発音とすることが記されています。特に古楽器を使う理由として、「これらの楽器の音色を愛し、奏すること、聴くことに興味を持つ人が増え続けているという現実の姿がある」とあり、歴史的考証や奏法も大切なことではあるが、今の私たちの欲する音と表現の生み出されることを願って、との考えが述べられていました。ピリオド楽器に関心を持ち始めた時期の記録です。演奏者を列挙しておきましょう。

独唱：S：石塚瑠美子、伊庭緑 A：串田委子 T：佐々木正利 B：故・斉藤俊夫  
 器楽：Vn：小野萬里、若松夏美、橋爪美穂、小淵晶男、斉藤和久、三塚美秋 Va：李善銘 Vdg：中野哲也  
 Vne：西澤誠治 Fltr：中村忠、朝倉未来良 Ob：川村正明、庄司知史 Fg：植野真知子、宮脇香里  
 Cor：磯部保彦 Trba：津堅直弘、織田準一、丸山研也  
 Timp：近藤健一（現・高頭） Org：曾根麻矢子 Cemb：武久源造  
 指揮：淡野弓子

さて、この1988年はシュッツ合唱団創立20周年でもありました。これを記念し、以下3回のコンサートが企画されています。

その一 6月10日(金) 19:00 石橋メモリアルホール 〈12世紀オルガヌムよりシュッツまでの500年〉

その二 9月9日(金) 19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂 〈現代日本の合唱音楽〉

武久源造《初めに言ありき》(1987) 柴田南雄《人間と死》(1985)

その三 12月2日(金) 19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂 〈ハインリヒ・シュッツの音楽〉

《音楽による葬送》(SWV 279, 280, 281) (1636) 《クリスマス物語》(SWV 435) (1664)

記念演奏会「その一」では、シュッツ、G. ガブリエリ、ラッソ、ダンスタブル、アルス・アンティカ(c.1250-1320)のモテートウス、ヴォルケンシュタイン、オトマイヤー、アルカデルト、イザーク、モンテヴェルディ、ペロティヌスと目の回りそうな曲の数々が歌われました。特筆すべきは「アンサンブル・オルガヌム『永遠の少年』」という武久源造をリーダーとする当時の独身青年たちのグループが発足し、実に真剣に『オルガヌム』の演奏に取り組んだことでしょう。石井賢、井出光、木田新一、小酒井貴朗、淡野太郎、長澤均、細川裕介、水野浄、依田卓、守安功それに武久源造の11名がメンバーでした。すでに四半世紀が経過した今、独身者は2、3名となりましたが、カテドラルのあの冷たく堅い床に裸足で立って歌った彼らの力強い声をもう1度聴いてみたいものです。

「その二」では再び柴田南雄《人間と死》に挑戦し、さらに武久源造の《初めに言ありき》を歌いました。無我夢中でシュッツを歌い続けた私たちでしたが、20年も経つとさすがに自分たちの周りにも目が向くようになりました。例えば、西洋人の見た音楽史を疑いもなく「音楽の歴史」と思い込んでいるわれわれ、「神」と「信仰」も風俗習慣として捉えているわれわれ・・・などなど、西洋のキリストの音楽に真正面から取り組もうとした途端にキシキシと音を立てる得体の知れないなにか・・・を正直に見据える時がやってきたのです。

柴田南雄の《宇宙について》や《人間と死》には、この「キシキシ」の現場が生々しく描かれ、それらが想像を絶する音となって響き渡るのです。まことにそれは新しい音楽史に触れる思いでもありました。さらに《人間と死》の中では、一瞬にして世界が崩壊するかに見える異文化のきしみ合いが聞こえるかと思うと、女声が死者ミサのゼクエンツィア「ディエス・イレ」を歌うなか、男声がD音のみで「理趣経」を唱える箇所があり、遠く離れた文化が、同時に響き合う美しさに茫然としたのを覚えています。さらにこの音楽には、悠久の時の流れと瞬間を切り取った鮮やかな時が重ねられていて、私たちが普段、時計の言うなりになっている生活の薄さといったものにも気付かされたのです。

武久源造の《初めに言ありき》はルター訳聖書の詩編と福音書から歌詞が選ばれ、シュッツ、ブクステフーデ、バッハ、ブラームス、ディストラーらが尊重した「ムシカ・ポエティカ」の精神と作法に則って作曲されたドイツ語のカンタータです。日本では恐らく初めての試みであり、また先に挙げた作曲家たちの後継たらんと意欲に溢れた作品でした。この日の初演をきっかけに、武久源造は数々の優れた合唱作品をシュッツ合唱団のために書くこととなります。

12月2日(金)、いよいよ20周年記念演奏会も最後の回となりました。私たちはこの大切な時をすべてシュッツの作品に捧げることとし、《ムジカーリッシェ・エクセクヴィエン》(SWV 279-281)、《全地よ、主に向かって

喜びの叫びを上げよ》(SWV 262)、《我が子、アプサロンよ》(SWV 269)、《クリスマスの物語》(SWV 435)の4曲を演奏することとなりました。中の2つのソロ作品は、この年ハインツ・レークナー指揮ベルリン放送響とともに《第9》のソリストとして(旧)東ドイツから来日されたバスのヘルマン・ポルスター教授(Prof. Hermann Polster)が歌ってくださいました。ポルスター教授はドレスデンのクロイツ聖歌隊を経てカール・マルクス大学(現・ライプツィヒ大学)で音楽学を学ばれ、のち歌手になられた方です。シュッツを隅から隅までご存知の音楽家と共に歌えたことは、どれほど私たちの励みになったことでしょうか。淡野太郎はのちにライプツィヒでポルスター教授の教えを受け、歌唱のみならず音楽学に裏打ちされた確かな解釈に感銘を受けたとのことでした。

《クリスマスの物語》のテノールソロは故・鈴木仁さん、天使は石塚瑠美子、大石すみ子が歌い、器楽は Fld: 守安功、安井敬 Vn: 小野萬里、小淵晶男 Trmb: 織田準一、島田俊雄 Trbne: 萩谷克巳、村岡淳志 Fg: 川村正明 Vdg: 中野哲也 Vne: 西澤誠治 Org.p: 武久源造という陣容でした。

記念演奏会のコンサート・プログラムにはシュッツ合唱団員のメッセージが各回に掲載されています。どのメンバーのコメントも非常に興味深く全部ご紹介したいほどですが、この紙上では難しいので場を改めたいと思います。

明けて1989年1月10日(火)石橋メモリアルホールにおいて、第二回目となる〈守安功リコーダーリサイタル〉—リコーダーの領域そのIIが開催されました。共演は第一回と同じく安井、中野、武久の各氏、プログラムはクロフト、オトテール、カステッロ、アイク、テレマン、広瀬量平、武久源造の作品でした。

このプログラムの冒頭で守安功は「数年来、常に己の血について、我々の背負っているものについて、そしてそれらと余りにかけ離れたヨーロッパの土や音について考えを巡らせ、“ヨーロッパという得体の知れぬ怪物とがっぷり四つに組む決意”についても語ったが、いつか宿命と能動的に接するようになった」と述べています。彼の地のフォーク・ミュージシャンや邦楽人との語らいに心を躍らせる彼の気持ちも吐露されています。さらに「上述のバロック音楽を自らの息吹きで語り掛けたい」とも。本稿の最初に掲載させて戴いた守安さんの現在と見事に照応していることに驚いています。

前年はバッハ《ミサ曲 ロ短調》(BWV 232)公演のため、〈受難楽の夕べ〉は開かれませんでした。この年の受難節にはバッハ《マタイ受難曲》(BWV 244) (3月3日(金) 18:30 武蔵野文化会館大ホール)を演奏しました。周知のように、I群、II群に分かれた独唱陣、合唱陣、器楽陣を必要とするこの大曲を演奏するには、まず平常の2倍の演奏人員、練習時間と場所の確保に始まり、器楽奏者に送るパート譜も平常の倍を超え、各曲の編成がさまざまなため、演奏者のスケジュール合わせも困難を極めます。私はこの公演の前に丸二日徹夜を余儀なくされ、当日は袋に入れた各演奏者への謝礼をポンと事務所の机の上に忘れたまま会場入りしてしまったことを覚えています。

演奏メンバーは以下の通りです。

独唱: Ev: 佐々木正利 Jesus: 宮原昭吾 T(Aria): 鈴木仁 S(Aria): 徳永ふさ子、大石すみ子  
A(Aria): 石塚瑠美子、羽鳥典子

器楽: Fld: 守安功、庄司知 Fltr: 中村忠、朝倉未来良 Ob: 本間正史 Ob d' am: 庄司知史、大山有里子  
Ob da c: 川村正明、大山有里子 Fg: 堂阪清高

Vn: 小野萬里、若松夏美、高田あずみ、小淵晶男、石井紀子 Va: 李善銘、高岡真樹

Vc: 伊藤耕司 Vne: 西澤誠治 Vdg: 中野哲也 Org.p: 武久源造、曾根麻矢子

第I合唱: イースター・クワイヤ 第II合唱: ムシカ・ポエティカ声楽アンサンブル

指揮: 淡野弓子

それにつけても宮原昭吾さん、鈴木仁さんがお亡くなりになられたのが残念です。いろいろな方の生命を丸ごと戴いて演奏が成り立っていることをひしひしと感じ、「安かれ!」と祈らずにはおれません。

5月14日(日)は鎌倉泉水教会のお招きによるコンサートでした。横浜・樫の木会時代(淡野は1958年頃から61、62年まで指導)からの友人である池田尚徳さんがこの教会の会員でいらしたのがご縁だったと思います。また、バッハ《ヨハネ受難曲》(BWV 245)の演奏前に「ヨハネによる福音書」についてお話をし戴いた岡村民子先生もこの教会で聖書講座を開いておられました。新旧約聖書全66巻を一つのものとして捉えると、聖書の一句一節がまるで生きた人間の身体のように、互いに作用を及ぼしながらダイナミックに呼応し合っている、ということをお村先生は教えて下さいました。当時の理解は誠に幼いものでしたが、今になってみると、シュッツやバッハの新旧約聖書を縦横に駆け巡るテキストの組み合わせ方は、あの時岡村先生にお教え戴いた聖書の読み方に通じるものがあるのです。今を生きる生命体そのものといった彼らの音楽の秘密を垣間見る思いです。

この日のプログラムはシュッツ、パレストリーナの詩編に始まり、ファーマー、ギボンズらのイギリスのマド

リガル、モンテヴェルディのマドリガル、そして“永遠の少年”がペロティヌスのオルガヌムを歌い、最後はバッハの《イエス、わたしの喜び》(BWV 227)でした。この《Jesu, meine Freude》(BWV 227)という曲はその昔、池田尚徳さんが歌っておられた横浜・榎の木会で何年にも亘ってさらに続けた曲で、この日も「この曲だけ一緒に歌わせて下さい」と仰り、メンバーに加わって歌われたことを思い出します。池田さんは今年の春、天に召されました。

さて1989年という年は私たちがシュッツの作品を全曲演奏しよう、という決心を固めた年でもありました。12年計画とし2000年には終了したいと考えていました。第一回演奏会を開く前に、シュッツの音楽のいろいろな風貌を知っていただけたらと、〈シュッツ音楽の華〉と題するコンサートを催すことにしました。実はこの年の4月16日に恩師ヴィルヘルム・エーマン先生逝去の報、知らずもこの会はエーマン先生へのメモリアルとしてお捧げすることとなったのです。当時は歌うことに夢中で深い意味を考える余裕もありませんでしたが、今思うに、エーマン先生が彼の世へ旅立たれた年に「シュッツ全作品連続演奏」が始まったとは！

この望みを服部幸三先生にご相談すると大変喜んで下さり、次のような激励のメッセージを当日のプログラムにお寄せ下さいました。

「シュッツ音楽の華」によせて

服部幸三

淡野弓子さんの指揮されるハインリヒ・シュッツ合唱団が、今年から連続12年の計画でシュッツの全作品の演奏に取り組み、と伺って、深い感動を覚えています。世界には、いくつかのシュッツ合唱団がありますが、このような壮挙は、誰も思いついた人がなく、誰も実行した人がありません。人の営みを越えた高い導きによって、淡野さんとシュッツ合唱団の計画が成就することを願ってやみません。今回はその計画の序として、シュッツの全生涯からの代表的な作品が花束のように編まれています。イタリアのヴェネツィアに学んだ多感な青年時代の作品である「イタリア・マドリガーレ集、作品1」からスタートして、最後は“ドイツ音楽の父”と仰がれながら、文字通り「白鳥の歌」となった「私の魂は主を崇め」まで。60年の歩みと推移が一夜のうちに展開されるのです。今晚の演奏会はまた、淡野さんが教えを受けられた故エーマン教授の思い出のために捧げられています。淡野さんは、いつもエーマン先生が東京でただ一度催された演奏会が自分の生涯を変えた、と言っておられますが、私もあの夜のことを忘れることができません。音楽を聞きながら、胸に熱いものがこみ上げ、涙を覚えるとき、大変幸せなのですが、あの夜はめったにないほど幸せでした。淡野さんはエーマン先生の門を叩き、演奏家として日本におけるシュッツ合唱団の創立者になりました。一方、私はエーマン先生の師匠でもある晩年のグルリット先生のもとで音楽学を学び、その方面からシュッツに接しました。エーマン先生がグルリット先生の最初の弟子で、私が最後の弟子であったことは、不思議な縁と言わなければなりません。淡野さんがエーマン先生の逝去に胸を痛めておられることが良く分かります。けれども、人はすべて過ぎ去るべきもの。他方、音楽の言葉は、それを受け継ぐ人がいれば、先きへ先きへと燃えさかっけて行きます。シュッツの全作品の演奏は、エーマン先生を喜ばせるだけでなく、音楽の世界への大きな捧げ物になるでしょう。ご来聴の皆様方に私からも心からのご声援をお願い申し上げます。

〔国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部長・東京芸術大学音楽学部教授〕

服部先生は、歴史における音楽の意味、演奏の役割といった難解なテーマを平易な語り口でお話下さいました。「音楽の言葉は、それを受け継ぐ人がいれば、先きへ先きへと燃えさかっけて行きます。」とのお言葉に、心の炎をエネルギー源として運動を続けるわれわれ演奏者はどれほど力付けられることでしょうか。

この日のプログラムと演奏者は以下の通りです。

《イタリア風マドリガーレ》(1611)より〈広い海〉(SWV 19)〈幸いの森よ〉(SWV 3)、《ダヴィデの詩編曲集》(1619)より〈われ、山に向かいて目を上ぐ〉(SWV 31)、《カンツィオーネス・サクレ》(1625)より〈主よ、わが心に來たりたまえ〉(SWV 83)、《シンフォニエ・サクレ I》(1629)より〈恋しい人の言葉を追って〉(SWV 263)〈エルサレムの娘たちよ〉(SWV 264)、《パリサイ人と取税人のディアローグ》(1630)より〈ふたりの人が宮に詣で〉、《復活祭のディアローグ》より〈女よ、なぜ泣いているのか?〉、《小宗教コンツェルト集 I》(1636)より〈神よ、速やかに私を救ってください〉(SWV 282)、《同 II》(1639)より〈もし神がわたしたちの味方なら〉(SWV 329)〈主のみ声は水の上にあり〉(SWV 331)、《シンフォニエ・サクレ III》(1650)より〈サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか?〉(SWV 415)〈息子よ、どうしてこんなことを〉(SWV 401)、《白鳥の歌》(1671)〈わが魂は主を崇め(ドイツ語マニフィカト)〉(SWV 494)。

演奏者: Vn: 小野萬里、田辺玲子、Vdg: 中野哲也、Vne: 西澤誠治、Fld: 守安功、安井敬、Fg: 川村正明、

Org. p: 曾根麻矢子、武久源造    ハイน์リヒ・シュッツ合唱団  
指揮: 淡野弓子

この年の秋、10月6日(金)18:30 東京カテドラルにおいて〈シュッツ全作品連続演奏〉が始まりました。この日までに私たちが演奏したシュッツの作品はおよそ120曲、全作品の4分の1ほどでしたが、この日をきっかけに、これまでの演奏にこだわることなくすべて始めから、という決心でした。

第1回の曲目は《ダヴィデの詩編曲集》(SWV 22-47) (1619)全26曲です。プログラム・ノートは当シュッツ協会日本支部の現支部長でいらっしゃる正木光江先生に執筆をお願いしました。

《ダビデの詩編曲集 作品2》の全曲上演によせて——と題された正木先生の解説には、作品の成立年代、シュッツが作曲した詩編、全体の構成、音群の意味するところ、様式について、畳句を持つ詩編第136編についてなどが詳しく丁寧に記され、読み返せば今も、行間から一曲一曲が立ち昇って来るようです。

演奏者: Z: 濱田芳通 Fl d: 守安功、安井敬 Fg: 川村正明 Vn: 小淵晶男 Vdb/Lut: 中野哲也

Vdg: 石川かおり、市瀬礼子、西谷尚記 Trmb: 織田準一 Trmb: 萩谷克己、村岡惇志 田中徹

Vne: 西澤誠治 Cemb: 曾根麻矢子 Org. p: 武久源造    ハイน์リヒ・シュッツ合唱団

なにが待ち受けているか分からない道をただ先へ、というわれわれの無鉄砲な冒険の旅はこうして始まったのでした。地図はシュッツの譜面のみ、それも新全集、旧全集を合わせてやっと全曲か？ という危なっかしい状態でした。また、どこでどのような譜面が出てくるか、これもこの時点では全く分かりませんでした。私はただ、この全曲演奏が終わるまで、大きな戦争に日本が巻き込まれないことを祈るばかりでしたが、そこに驚くべきニュースが飛び込んで来ました。

ベルリンの壁が崩壊したのです！ 11月9日深夜から10日未明にかけてのことでした。人々に呼びかけるマズーア教授の声！ あの日の興奮を忘れることはないでしょう。

12月7日(木) 18:30 上野学園石橋メモリアルホールにおいて、バッハの《クリスマス・オラトリオ》(BWV 248) 全6部をイースター・クワイヤと古楽器アンサンブルによって演奏しました。

独唱: S: 嶺貞子、徳永ふさ子 A: 荒道子 T: 佐々木正利 B: ヘルマン・ポルスター

器楽: Trmb: 織田準一、福田善亮、曾我部清典 Timp: 近藤健一 (現・高頭) Fltr: 中村忠、朝倉未来良

Ob/Ob d' am: 本間正史、川村正明 Ob da. c: 浅間信慶、奥山茂 Cor: 山岸博、野瀬徹

Vn: 小野万里、渡邊慶子、高田あずみ、田辺玲子 Va: 高岡真樹 Fg: 堂阪清高 Vdg: 中野哲也

Vne: 西澤誠治 Cemb: 曾根麻矢子 Org. p: 武久源造

指揮: 淡野弓子

ご存知のように、この曲の最初のコーラル「どのようにお迎えしたらよいのでしょうか」の旋律は《マタイ受難曲》に幾度となく現れる「血潮したたる主の御頭」です。クリスマスの日イエスが十字架上でなぶり殺しにされたことを思い出させるこの手法に触れて、伏線につぐ伏線、布石また布石のバッハ音楽に少しずつ目覚めるにつれ、彼の言葉の用い方や創作技法に興味を募り、徐々に親近感が湧いてきたのはこの頃でした。ルーマニアのラジオが「キリストに背くものがクリスマスに死んだ！」とチャウセスクの処刑を報じ、激動の1989年が暮れて行きました。

1990年1月14日(日) 14:30 武蔵野市民文化会館小ホールにおいて、〈オルガン友の会定期演奏会〉(オルガン友の会主催)に出演、〈ルネサンス★珠玉の合唱小品集★とバッハのオルガン曲〉とのタイトルのもと、シュッツ合唱団と‘永遠の少年’の合唱、オルガン: 武久源造が演奏しました。そして迎えたのは〈受難楽の夕べ〉です。

3月16日(金)のことでした。「お御堂にこれほどの人が集まったのは初めてだ」と当時カテドラルの事務局にいらした山本さんが慨嘆されたのを覚えているのですが、実にこの日は大変でした。普段録音をお願いしているコジマ録音の小島幸雄さんは無論のこと、NHKのTVカメラや各新聞社の人々が続々と詰めかけ、床には何本ものコードがうねり、ざわざわと落ち着きません。そこへ到着されたのがアルヴォ・ペルト(Arvo Pärt 1935-)氏、取材陣が駆け寄り大騒ぎとなりました。

ペルト作曲《ヨハネ受難曲》(1982)日本初演の日でした。当時ポリドールにいらした鈴木徹太郎さんからこの《ヨハネ受難曲》のCDを戴き、演奏したいと思い立って1年目のことでした。

当日の演奏者は次の通りです。

独唱: イエス(B): 宮原昭吾、ピラト(T): 佐々木正利 福音史家(SATB)と合唱(SATB): ハイน์リヒ・シュッツ合唱団

器楽: Vn: 小野萬里 Ob: 川村正明 Fg: 堂阪清高 Vc: 伊藤耕司

指揮: 淡野弓子

テキストとなったヨハネによる福音書 18:1- 19:30(ラテン語)は 171 もの部分に分断され、この一片一片に各声部が寄って来たり去ったりするため常に音色が変化します。その度に倍音構成が変わるので、響きは薄くなったり厚くなったりし、あちこちで鐘が鳴っているように聞こえるのです。周知の「ティンティナブリ(鈴鳴り)様式」ですが、このような音は常に現在を語っているように聴こえ、物語の推移というよりは、そこに起こった出来事の原因、結果そしてその影響を瞬時に伝えてしまうような神秘感に溢れています。

この日はペルトに先だち、菅野浩和(1923-2011)のオルガン曲《三つの悲歌》(1985)が武久源造によって演奏されました。グレゴリオ聖歌とヴィクトリアのモテットの旋律を音素材とした本格的な受難楽でした。

あれだけ微細でモノクロ写真のような音楽にも拘らず、コンサートの反響は凄まじいもので、ペルトの響きが当時いかにコンテポラリーなものであったかが窺われます。

ペルト氏は物静かで修業中といった雰囲気の方でした。「私は取るに足らぬもの」といった感じがお話の端々に滲み出て、会話は代わる代わる唱えるお祈りのようでした。別れ際に下さった小さな長方形のマリアのペンダントは飾り棚に置いて大切にしています。

4月19日(木) 19:00 武蔵野文化会館大ホールにおいて、モンテヴェルディの《Vespro 聖母マリアの夕べの祈り》を演奏しました。なんとこのころ、シュッツ合唱団のメンバーは35名、イースター・クワイヤは37名という大世帯でした。

武久源造はこの日のプログラム・ノートに「《Vespro》はヨーロッパ音楽に君臨する最高峰であり、大空にパッと輝く太陽のような音楽・・・」「定旋律という幹から枝や葉、花のように各声部が広がる。それは自然という大宇宙と人間の心という小宇宙にうごめく様々なエネルギーを包み込む神の秩序の模倣である。」と記していますが、私はもともと音楽に内在する真善美のうち、特に「真」に興味があり、音楽に潜む「神の意図」といったものを知りたいと欲していました。シュッツやバッハの音楽からは、隠された形で象徴的に知らされる宇宙の秘密が、モンテヴェルディの音楽からは常に大胆に鮮やかに、そして万華鏡のように映し出されることにも驚いたのです。演奏者は以下の通りです。若い生命とその天賦の才を惜しまれて2004年5月21日にこの世を去ったフォルテ・ピアノ奏者小島芳子さんが、初めて私たちと共に演奏して下さった公演でもありました。

声楽: T: 故・鈴木仁 アンサンブル・オルガヌム「永遠の少年」 ムシカ・ポエティカ声楽アンサンブル  
イースター・クワイヤ ハインリヒ・シュッツ合唱団

古楽器アンサンブル: Trba: 津堅直弘、市川和彦 Trbne: 田中徹、村岡淳志、萩谷克巳

Fld: 守安 功、安井敬 Z: 濱田芳道(現・芳通)、及川茂、吉澤賢太郎

Vdg(treble): 平尾雅子、福沢宏 Lut: 中野哲也 Bc: Vdg(Bass): 中野哲也、福沢宏

Vne: 西澤誠治 Org. p: 故・小島芳子

9月6日(木) 19:00 東京文化会館小ホールにおいて Heinrich Schütz und seine Kunst(II)

《カンツィオーネス・サクレ Canticiones sacre》(SWV 53-93)(1625)のコンサートを開催しています。〈全作品連続演奏〉もやっと2回目、私たちは「難解」とされる《カンツィオーネス・サクレ》に取り組みました。全40曲のラテン語によるモテットを2度に分けて歌うこととし、この日は第1番から第20番までを演奏しました。

この作品はシュッツのカトリック教徒の友人、エゲンベルク侯ハンス・ウルリヒに捧げられたもので、ある種の宗教的恍惚感に彩られたまことに神秘的な音楽です。プロテスタントのシュッツがなぜ? という観点からは説明することが難しく、今は亡き野村良雄先生に「《カンツィオーネス・サクレ》、あるいはシュッツの宗教作品全般、あるいは日頃のご思索の断片でも」と解説をお願いしました。

「・・・シュッツはドイツ的・プロテスタント的音楽観の地盤に育ち、厳格にルターの方向をとりながら、神秘的有頂天のあらゆる光熱を体験し、かつ新しい音楽の手段で、作曲したのである。彼は時代の伝統的正統派的潮流を個人的神秘的なものと交流させて、音楽的形成においてひとつの均衡をもたらした・・・」とは野村先生のお言葉です。先生は更に「対立や差別を超える何かである。」とも語っておられますが、カトリック、プロテスタントを問わず、「を超える何か」に心を打たれる人は、歌い手にも聴き手にも多く存在しています。さらに言うなら、シュッツを好む人たちは時代や国籍を超えたところで共感し合っているのも事実です。

このコンサートの3週間後9月27日(木)にはなんと(!)〈アグネス・ギーベルを迎えて—ドイツ歌曲の夕べ〉が開かれています。この会をきっかけに、私たちはこの先およそ12年に亘ってギーベル先生から「声の秘密」についての教えを受けることとなりました。次回ははいよいよ世紀のバッハ歌手、アグネス・ギーベルの登場です。(続)

## 会員動静

退会: 桐朋学園大学音楽学部附属図書館(2011 年末にて)

## 会員の活動状況

演奏会や企画等(これから約半年の間に開催されるもの)

淡野弓子(お問い合わせ [yumiko@musicapoetica.jp](mailto:yumiko@musicapoetica.jp) Tel 03-3970-0585, Fax 03-3998-5238)

- 1) 2013年1月14日(月/祝) 14:00 於: 新宿文化センター大ホール  
メンデルスゾーン: 詩篇歌 42 編、ベートーヴェン: 交響曲第9番  
演奏: S: 佐竹由美 A: 永島洋子 T: ツェーガー・ファンダステーン B: 浦野智行  
メンデルスゾーン・コア & シュッツ合唱団 / ユキビタス・バッハ  
指揮: 淡野太郎
- 2) 2013年2月4日(月) 19:00 於: 東京文化会館小ホール  
淡野弓子 M. ソプラノ・リサイタル〈歌曲の夕べ〉(共演: 小林道夫)
- 3) 2013年3月22日(金) 19:00 於: 東京カテドラル聖マリア大聖堂  
〈受難曲の夕べ〉  
R. マウエルスベルガー: ルカ受難曲、H. シュッツのモテット他  
演奏: ハインリヒ・シュッツ合唱団  
指揮: 淡野太郎

橋本周子(お問い合わせ、詳細は <http://www.st-gregorio.or.jp>)

- 1) 2013年3月3日(日) 15:00 於: 聖グレゴリオの家 聖堂  
グレゴリオ聖歌、J.R. ラインベルガー: ミサ A. ヴィヴァルディ: マニフィカート etc.  
演奏: 聖グレゴリオの家合唱ゼミナール合唱団  
指揮: 橋本周子
- 2) 2013年4月15日(月) - 6月17日(月) 月曜日 10:15 - 全7回 於: 聖グレゴリオの家  
合唱ゼミナール(講師: 橋本周子)
- 3) 2013年5月5日(日)、6日(月)  
第33回教会音楽講習会(講師: 橋本周子)

荒川恒子(お問い合わせ [eterna@nifty.com](mailto:eterna@nifty.com), Tel/Fax 045-421-0502)

- 1) 2013年4月27日(土)-29日(日) 於: 山梨市街の数箇所(甲府商工会議所、甲府市社会教育センター etc.)  
2013年4月30日(月)-5月1日(火) 於: 聖グレゴリオの家  
古楽フェスティバル〈山梨〉(含む国際古楽コンクール〈山梨〉)  
第26回国際古楽コンクール(応募部門: バロック・古典派の音楽/ バロック時代の旋律楽器)、審査委員や  
入賞者によるコンサート、楽器・CD・楽譜等の展示、楽器のデモンストレーション、フェスティバル・  
カフェ、バロック歌唱マスター・コース etc. 詳細は <http://homepage2.nifty.com/eterna/>
- 2) 2013年7月4日(木) 19:00 近江楽堂  
2013年7月9日(火) 19:00 山梨県立図書館多目的ホール  
「ムジカ エテルナ 甲府」第82回定期演奏会 詳細未定

著書・論文・口頭発表・CD 制作等(最近のもの)

淡野弓子

- 1) 講演と合唱指導  
2012年8月17日(金) 10:00 - 於: 日本福音ルーテル東京教会(新大久保)  
日本声楽発声学会 夏季研修会「教会音楽の変遷ーバッハに至る賛美の歌の歴史」において  
「シュッツの出現」イタリア・ルネサンスからドイツ・バロックへと題して講演、さらにシュッツの〈Die mit  
Tränen säen〉(SWV 378) の合唱指導
- 2) CD 制作  
2012年3月31日にハインリヒ・シュッツの音楽 Vol. 3 《ルカ受難曲》リリース。2013年1月14日に Vol. 4  
《ガイストリッヒェ・コーアムジーク 1648》リリース予定

橋本周子

1) CD 制作

2012 年 11 月に「至高のハーモニー—心に深く静かにしみわたる二つのミサ」リリース

演奏: カペラグレゴリアーナ・ファヴォリート

指揮: ゴデバルト・ヨッピヒ

荒川恒子

1) 口頭発表

2012 年 11 月 25 日(日) 11:05 於: 西本願寺聞法会館

日本音楽学会第 63 回全国大会にて「ザクセン選帝侯国における教会音楽について—ヨハン・ゲオルク 2 世からフリードリヒ・アウグスト 2 世の時代にかけて」と題して発表